

シスパーク北東壁初登攀

平出和也 (ICI石井スポーツ所属)

私にとってシスパークは“人生をかけて登る価値のある山”としていつも頭の片隅に消えることなく存在していた。



2002年、私は単身パキスタンへ旅に出た。手には、過去の登山隊の登ったラインを全て書き込んだカラコルムの地図を持っていた。線の引かれていない、人が立ち入っていない空白部分にどんな宝物（未踏峰や未踏ルート）が埋まっているのかを探しに行く旅だった。そこでシスパークに出会った。ピラミッドのような美しい山容と未踏で残されている大きな北東壁に一目惚れし興奮したのをついこの前のように覚えている。しかし登山経験の浅い私には、すぐに



シスパーク北東壁の全景

に挑戦できる山ではなかった。ステップアップしながらチャンスを待ち、5年後の2007年にやっと1回目の挑戦が訪れた。やはりあの北東壁の中央にラインを引きたいと、意気揚々とパキスタンに向かった。しかし結果は、6,000mで不安定な雪質から敗退した。“命をかけて登れない山なんてない”と若さと未熟さ故に、敗退を敗退として受け入れられない気持ちから出た言葉だった。

私はこれまで敗退した山に再度挑戦することはなかった。しかし、このシスパークだけは違った。登山界で賞を数々もらったり、私たちの登山がきっかけで亡くなったレスキューチームの事故など、数々の良かった事や悪かった事を踏まえもう一度原点に帰りたくなったのだ。シスパークは私に登山家として何が足りないのか、人間として何が足りないのかを教えてくれるような気がしたのだ。

再びシスパークにかえったのは2012年。今度は、前回とは反対側の南西壁から挑戦した。この面も高低差3,000mの大きな壁が、未踏のままで残されていて私を惹きつけた。しかしこの挑戦は不安定な天候から5,350mであっけなく終わった。しかし“命をかけても山は登れないな”と敗退を受け入れられる自分に少なからずの成長を感じた。

3度目の挑戦は翌年の2013年、上部のルートにはまだ可能性があったので前年同様、南西壁から挑戦した。この時のパートナーは2008年にカメットと一緒に登った谷口けいだった。私にとって最高のパートナーとの挑戦に登頂の可能性を感じていたが、結局5,700mで敗退。上部にある大きなセラックの恐怖

から逃げて帰った。“人生において登れない山が一つくらいあっても良いのかな”絶望感の中で出た言葉だった。もうこれ以上シスパーレに挑戦することはないだろう、と。

2015年冬、長年パートナーを組んでいた谷口けいの遭難死。突然訪れた悲劇に、私の今までとこれまでの登山に疑問ばかり感じていた。多少時間がかかったが、私は彼女の思いと共に登ろうと再び登山をすることを決意した。翌年の2016年、新たに中島健郎とパートナーを組みチベットのルンポカシリ(7095m)北壁にダイレクトなラインから短時間で登頂するという大成功を収めたが、私の心の中のモヤモヤは完全には解消されなかった。そんな私が必要としたのはやはりシスパーレだった。原点の山にさえ登れば、新たな道が歩き出せると考えたのだ。だから今回の4度目の挑戦は、かっこいいラインやスタイルにこだわらず山頂に必ず立ちたいと強く思っていた。幸い信頼できる新たなパートナーとも出会い、ヒマラヤの壁も一緒に経験し、私のシスパーレに対する思いも理解してくれ、準備は全て整った。

遠征をこの1月に計画し準備にかかったが、春にエベレストからデナリへハシゴで撮影の仕事をしていたので、夏はあつという間に来た。しかし、それでも心穏やかでいられたのは、登山の拠点になるフンザという村が、私にとって第二の故郷のように温かく迎え入れてくれることを知っていたからだ。杏は今年も豊作でみんなを笑顔にさせ、旧友との再会を喜んでいるうちに私はいつのまにかベースキャンプに着いていた。ベースキャンプにはパキスタンのパスピーク登山隊が既にいたが、氷河のコンディションが悪いと登山期間を1ヶ月も残し帰っていった。

静かになったベースキャンプでやっと僕たちのステージも整い、登山が始まった。今回も天気が全般的に悪く、ベースキャンプでチャンスを待つ時間が

長くモチベーションを維持するのが大変だった。また登攀中も終始雪崩とスノーシャワーの脅威に襲われていた。しかし、これまでの遠征では困難や危険に直面し判断を迫られた時、やらなくてもいい理由を探して「しない」選択をしていた気がする。今回は、もしそんな判断を迫られた時は、1パーセントでも可能性があるのであればそれにかけ、「する」という選択をしたいと思っていた。それはパートナーの谷口が志半ばで亡くなったからこそ、今生きている私は、登るモチベーション、環境、チャンスなど全てが備わっているからこそ簡単に諦めてはいけないと思ったのだ。そしてこの判断の積み重ねが今回の成功につながったと思っている。今は、このシスパーレを上回る山に今後会えるかが不安である。

シスパーレ行動記録

- 7月17日 日本—イスラマバード
- 7月25日 パスーよりトレッキング
- 7月26日 BC (4000m) 入り
- 7月28・29日 初登ルート5600mまで偵察・順応
(宿泊5160m)
- 8月1～4日 パスピーク方面へ6750mまで順応
(宿泊6400m)
- 8月7～9日 好天待ちのため、フンザで休養
- 8月13・14日 アタックを試みるも大雪の為5000mで一泊してBCに引き返す
- 8月18日 BC-C1 (5450m)
- 8月19日 C1-C2 (6500m)
- 8月20日 C2-C3 (6850m)
- 8月21日 C3停滯
- 8月22日 C3—山頂 (7611m)—C4 (7200m)
- 8月23日 初登ルート下降—C5 (5750m)
- 8月24日 C5—BC
- 8月25日 BC撤収—フンザ

6. 海外登山記録

8月28日 イスラマバード着

9月1日 日本着

7月21日、イスラマバードより陸路でフンザへ向け出発。夏季のみ通行可能なバブサル峠経由でチラスに入り、そこからはKKH（カラコルムハイウェイ）をフンザへと北上していく。近年、フンザは外国人よりもパキスタン人観光客で賑やかでびっくりする。

►トレッキング

7月25日、KKH沿いのパスー村からジープに乗り換え、Borith Lakeを越えて終点のZeroPointよりトレッキングを開始する。初日の歩きはLuzhdur（ラズドゥール）まで3時間半ほどだが、白く綺麗なパスー氷河を横断する。ポーターたちの巧みなルートファインディングで、迷路を抜けた左岸のモレーンに広がる草原でキャンプをする。

翌26日は、尾根上のPatundas（パトゥンダス）までを急登。視界が一気に広がり目の前には目指すシスパークが見え、足元には花の絨毯が広がっていた。パスー氷河左岸にある4000mのBCまで緩い下り道をたどる。この日も約3時間半ほどの歩きで昼にはBC到着。パスー氷河を目標とするパキスタンの登山隊が既に入山していた。

►高度順化・下降路の偵察

7月28日、高度順応と下降路・北東壁の偵察を兼ねて、初登ルートへ向かう。BCからパスー氷河を横断して右岸に渡り、東支稜に取り付く。氷河はまさに迷路のようで、右往左往しながら安全なルートを探すも、クレバスをジャンプでやり過ごす場所も多かった。東支稜に取り付くタイミングも難しく、氷河と東支稜側壁のコンタクトラインを行ったり来たりしながら進み、西面の雪壁から稜線に上がる。翌日はさらに上部5600mまで稜線をたどり、下降路の状況を把握し一気にBCへ戻った。稜線の岩稜には過去の登山隊が設置したFIXロープが多少残っていた。

►パスー氷河

BCで2日間休養した後、パスー氷河へ向けて出発。パスー氷河（7478m）はシスパークの北西8km程に位置し、下部アイスフォールさえ越えてしまえば技術的困難は少なく登れる。今回は高度順応とシスパーク北西稜の偵察のために登山許可を取っていた。パキスタンのパスー隊は下部アイスフォールの状態が悪く、ルート工作も進まず早々にBCを撤収し下山していった。我々は遠回りではあるが、パスー氷河の右岸からシスパーク北面のプラトーに登り、大横断してパスー氷河へ向かう安全なルートから進んだ。残念ながら悪天候に阻まれ、登頂することはできなかったが、6750m（6400mで2泊）まで高度順化を行いBCへと下山した。次の好天期でシスパークに挑戦かと思われたが、数日間の悪天予報が続いた為フンザに下山し3日間の休養をとる。

►シスパーク 1回目の挑戦

BCに戻っても、相変わらず曇りや雪の天気が続き、天気予報とのにらみ合いが続く。今年の夏はパキスタン全土で雨が多く、山岳地域は土砂崩れも頻発していたらしい。パスーでの高度順応から9日後、しづれを切らして、多少の悪天なら下部では影響が少ないと判断し、曇り空の下BCを出発したが、午後から降雪でホワイトアウトになり進むべき方向もよく分からなくなってしまった。結局、5000mで一晩待



壁の中央部へと入っていく

機したが、積雪も40~50cm程あり、到底壁に取り付ける状態ではなくなってしまい、渋々とBCへ引き返す。

►シスパーレ2回目の挑戦

ここまでできたら、我慢比べ。壁の雪が安定して、安全に取り付けるまで、最後のチャンスにかける。予報では晴れになっていても、シスパーレの山頂だけは常に曇っていてなかなか姿を見せることはない。明らかに登山前半の天気とは変わってしまった。

8月17日、午前中の数時間だが、天気が回復し、シスパーレの壁に陽が当たった。翌18日も相変わらずスッキリしない天気だが、意を決してBCを発つ。歩き慣れた迷路氷河を横断し、いよいよ北東壁に取り付く。初日はセラック崩壊の危険性が高いルンゼから始まるが、案の定大きな崩壊に捕まる。最初は小さな崩壊で少し雪を被ったぐらいで済んだものの、2回目は大きな音と雪煙で、見るからにこれはヤバいという規模。急いで逃げるも、途中で中島の片足がクレバスにハマり、繋いでいるロープもピンと張られ、お互いが中途半端にしか隠れられず、1分ほど爆風雪にさらされる。しばらく息ができないほど強烈な風であったが、お互い埋まることはなく、事なきを得た。逆にこんな大きな崩壊にあっても、なんとかなるという吹っ切れたのと、さすがにしばらく大きな崩壊はないだろうという勝手な安心感で、その後はスムーズに通過できた。天気の影響で出発



核心部をリードする中島

が遅れたこともあり、初日は予定より少し手前の雪稜上で整地して幕営。



C1からの上部

8月19日、テントサイトより尾根を乗越して60~70°の冰雪壁に取り付く。少し雪が被っているものの、ほぼアイスクリューでランナーが取れた。スピードをあげる為、中間支点は1本でひたすら同時登攀を続ける。スピードは早いものの、ふくらはぎは徐々に悲鳴をあげ始めた。S字状の冰雪壁を越え岩壁にぶつかったら、基部を左へ4Pトラバースしてルンゼ状岩壁に取り付く。この頃から天候は崩れだし、頭上からひっきりなしにスノーシャワーが降りかかる。当初の予定では、岩壁基部でビバークできるかと思われたが、そんな場所は一切なく、抜けきるか今日のスタートまで戻るかの選択しかなかったので、降りしきるなかクライミング再開。薄氷ではあったが、なんとかスクリューでランナーが取れた。時折大きなスノーシャワーに身体を剥がされそうになるのを耐えながら、2Pで岩場を越える。期待していたテントサイトはすぐには見つからず、ルートとは逆側の急雪壁を3P登ると、雪崩を避けられる雪稜に出られた。細い雪稜ではあったが、なんとか2人が横になれるスペースを切り崩し幕営。

8月20日、前日からの積雪が少しでも安定すればと、壁に陽が当たってから出発。前日余計に登った急雪壁を2P懸垂下降してルートに戻る。さらに冰雪

6. 海外登山記録

壁を左へ3Pトラバースすると、第2の岩壁基部に達する。傾斜は大してないものの（ 60° ）、大きなスラブ岩に雪や氷が乗っかっているだけで見るからに悪そうで、さすがにトップの中島も空荷になってトライ。前半はスクリューが半分まで入って効いているかどうかわからないプロテクションで進めるも、中間で氷も雪もないスラブ岩に支点が取れず時間を食う。中島が意を決してノープロテクションで突っ込みなんとか氷にアックスが刺さり、足ブラになりますながらも、次の一手を出す。氷で半刺しのスクリューでプロテクションが取れて気が緩んだのか、次の一手でアックスが外れフォール。奇跡的にどれも抜けず、怪我なく止まった。クライミング再開し、1Pで岩場を突破することができた。終了点からは3P冰雪壁をトラバースして“く”の字冰雪壁をひたすら登る。この頃からまた雪が降り出し、スノーシャワーが降り注いでいたので、確保しながらの登攀となつた。冰雪壁を登りきったリッジを切り崩して幕営。



核心部前のトラバース

翌21日、前夜から降り続いた雪は、何度もスノーシャワーとなって襲い、テントの半分以上は埋まっていた。朝から止む気配がなく、視界も悪いため1日停滞日となる。中島は高山病の影響が出ていて食欲は無くなっていた。

22日、予定していた核心部（岩場）も抜け、標高差的には山頂に届く高度だったので、気張って早起きするも、まだ雪は止んでない。視界が開けた6

時によくテントを出発する。前日までの降雪でスタートから深いラッセル。急斜面をバンザイしてラッセルしたり、空荷でラッセルする様は、まさに日本の冬山を登っているようだつた。しかし、日本のそれとは大きく違う標高の影響で、身体が思うように動かず時間がだけが過ぎてゆく。テントサイトから1P急雪壁、3P右の雪稜へトラバース、4P雪稜を登ると、ようやく頂上稜線へと出た。深い雪に苦戦し、時間は既に11時を回っていた。ここにきてようやく衛星電話が繋がったため、翌日の天気予報を日本から入手する。翌日の予報は悪くないものの、本日の予報もクリアとなっている。風雪にさらされ、どこがクリアなんだ！？と言いたくなるような天気ではあるが、視界はそれほど悪くない。頂上まで400m近く残っているが、置いていけるもの全てその場にデポして、少しの行動食と飲料、ロープ1本と最低限の登攀具を身につけて急いで頂上を目指す。風は強いものの、雲の隙間からラカボシが見えることがあった。途中からは完全に雲の中で、帰路の方角を確かめながら進む。視界が悪いため、幾度となく偽ピークに一喜一憂しながら冰雪壁を進んでいくと、ついに登るべくピークが無くなつた。山頂からの景色はなく、感動に浸る余裕も一切ない。時間は14時半を回っており、ホワイトアウトした帰路のことが気がかりだ。山頂から留守本部に電話を入れ、早々



シスパーレ登頂 平出(左) 中島(右)

に下山にかかる。既にトレースはほとんど消えていたが、コンパスを使用しながらなんとか暗くなる前にデポ地に戻る。視界があればさらに高度を下げたかったが、風雪で視界不良のため、本日はこの斜面を削ってビバークとなる。相変わらず夜中はスノーシャワーにテントを襲われる。

23日、相変わらずの風雪で目覚める。登頂の喜びなんかより、果たして安全にこの場を脱出できるのか。今やそんな状況と化していた。下山は雪崩やセラックの危険性が少ない初登ルートを選んだが、決して簡単なルートではない。東稜のプラトーはだだっ広く、視界がなければ下降路が見つけられない。視界が少しでも回復するよう、祈るような気持ちでテント内でスタンバイする。6:30頃、風は依然強いものの、視界が少し回復した隙を狙って出発する。雲の隙間から一瞬覗かせた下降路の東支稜へ進路をたどるも、行く手をセラックの絶壁に阻まれる。初登ルートの下部は偵察できていたものの、中間と上部は未体験。アップダウントンがある雪稜を下る程度にしか考えていなかったが、そう簡単には行かない。大きなセラックを迂回したり、セラックの舌端を懸垂下降をしたりと、過去の記録通りには連れなくなっていた。途中に3つのピークがあり、登り返しに少し苦労はするものの、徐々に視界も良くなり、風も弱まっていったため、できるだけ標高を下げることに専念する。

偵察時に到達した地点まで来て、ようやく帰路の安全が確保されて、安心して幕営する。BCを出発して6日目、ようやくスノーシャワーに悩まされることなく、フラットで安全な場所にテントを張ることができた。

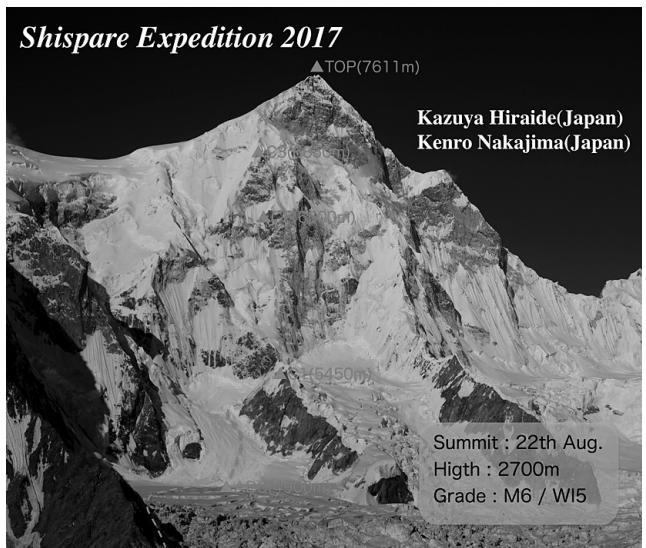
最終日、既に安全圏まで降りたように身体は錯覚したようで、足取りは重い。幾度となく横断した氷河も思い通り下れず、いつも以上に右往左往してベースキャンプに到着した。登頂時よりよっぽどベース

キャンプへ戻った時の方が、込み上げてくるものが大きかった。何より無事に戻って来られたことに。

ルート名は谷口けいさんと応援くださっている多くの方に感謝の気持ちを込めて、現地の言葉で“シェクリア”（ありがとう）と決めた。



登頂後のベースキャンプにて 平出(左) 中島(右)



今回のルート